

## 巻 頭 言

中央大学理工学部  
三松 佳彦

数学に垣根はない、有機的に結合している筈のどの分野も遍く勉強してみたい、実践は容易でなくてもそう思います。20世紀初頭・中葉に起こった数学の抽象化・細分化の流れは、各分野の発展を加速させたとともに各々の流れを狭い方向に追い込み、数学全体の有機性を弱めたとの批判もあります。より大きな目で見ると、数学と物理の乖離が戦後の西側諸国で進み、この現象を物理学者の側でどう捉えているのか筆者は把握していませんが、特に数学の側には大きな痛手となって表れたと思います。1980年代にゲージ理論が4次元トポロジーを席卷し始めたことは数学者の物理に対する意識を変える大きな要因の一つとなりましたが、乖離があまり起らなかったロシアに幾つかの分野で大きく先を越されていることに気付き愕然とされた方は多かったと思います。

数学の内部でも、専門から離れた分野の研究集会では、筆者の脳ミソでは容易には理解は及ばず、「談話会」のようなスタイルの講演でも一コマだけでは時間が足りません。数学の発展のためには中高生や大学初年次程度の若者へのアプローチも大切ですが、敢えて我々(私)自身にもっと広くて豊かな数学的背景・基盤を身に着けたいという意識から1996年の秋に中央大学理工学部にて ENCOUNTERwithMATHEMATICS (以下 EwM) を始めました。冒頭話が上段にかぶり過ぎましたが、本欄では EwM を開催するに至った経緯や、その運営の表裏などを紹介します。EwM のホームページ <http://www.math.chuo-u.ac.jp/ENCwMATH/> も併せてご参照下さい。

École Normale Supérieure de Lyon (ENS-Lyon) にて1988年秋に Étienne Ghys 氏を中心となり Rencontres Mathématiques (RM) という集会が始まりました。EwM はそれを模倣しています。RM は雑誌“数学”1992年1月号に坪井俊氏が紹介されており、上記 URL にも一部転載させて頂いています。坪井氏は RM で講演もされています。筆者は1994年から95年にかけて ENS-Lyon に滞在した折、RM に何度も参加する機会を得ました。数学の色々な分野にテーマが及び、門外漢が広くまたやや深めに数学を学ぶのに絶好の機会を与えていました。是非このやり方を持ち帰りたいと思った訳です。また、当時の ENS-Lyon の若い大学院生たちがみな古典力学などにしっかりとした素養をもっていることに驚きました。一方で、1994年秋、日本では Seiberg-Witten 台風が吹き荒れ、その余波はフランスいた私の e-mail にまで7重8重の引用マーク << のついたメールとして飛んで来ましたが、平均的なフランスの幾何学者たちはほぼ誰もその情報を知らず、メールを見せても興味深げに読んだ後、「僕には余り関係ないよ」という態度が普通でした。善し悪しは別として台風吹き飛ばされないしっかりとした数学的背景(根っこ)を持ってい

ることと無縁ではないように感じました。Seminaire Bourbaki (SB) のスタイルも日本で導入してみたいものの一つですが、齋藤毅さん(東大・数理, EwM の代数方面の企画でもご協力頂いています)からは SB は日本ではまだ難しいかな…というご意見を頂きました。それでも RM はできそうだと思う、当時大きな話題であった Fermat 予想の解決を第 1 回目のテーマに選んで 1996 年 11 月に EwM がスタートしました。

毎回、講演者の皆さんには非専門のプロの数学者を聴衆に想定して講演の準備をお願いします。大学院生にも分かる様にとお願いするのも一つの方法かもしれませんが、寧ろ、この様にお願いした方が、細かい定義などに拘泥せず、大きな流れが掴み易い講演が期待出来ると考えています。また、結果として、若い諸君も何かを大きく感じ取れるのではないかと考えています。例えばテーマが代数方面であれば、解析・幾何の聴衆を想定して準備して頂く訳ですが、それでも専門の極めて近い方々が多数聴衆として来られます。そこでもうひと押し、そういうお友達の顔を見ないようにして講演して頂くようお願いしています。講演者の皆様にはこのように大変な負担のかかる準備をお願いします、また実際素晴らしい講演をして頂いています。また、聴衆の質問も大きなポイントの一つです。この集会を一層実り豊かなものにするためには、専門外の方々の多数のご参加頂き、沢山の素朴な質問をぶつけて頂くことが不可欠です。是非ここをお願い申し上げます。EwM にとってテーマの選択・設定は勿論極めて重要なファクターとなります。1997 年から中大数学教室の同僚となった高倉樹さんをはじめ、小野薫さん、太田啓史さんなど服部スクールの方々にはいつも大変有益なご意見や提案を頂いており、感謝に堪えません。テーマの設定方法としては、数学的素材を先ずは選び、そこに複数の理論が集まってくる、というのが一つの理想像です。今後その様な企画ができればと考えています。

中央大学数学教室には教室事業として EwM を認めて頂いています。教員・職員の皆さんの実質的な絶大なるご協力がなければ続けることのできない集会です。EwM を始めて数年間は準備と現場の運営の細かいことに大変な労力と神経を使いましたが、徐々に手伝ってくれる大学院生(時には学部学生も)たちが準備と運営のノウハウを蓄積し始め、それを次々と後輩に伝達してくれるようになり、今では仕事の内容の細部までが立派に文書化されていて、任せておいてもビックリする程キチンと準備が出来上がってしまいます。EwM は現在信じ難い程素晴らしい環境にあり、感謝申し上げる次第です。他家 ENS-Lyon の RM は世紀の変わったところに自然消滅してしまいましたが、その数年前頃 Ghys 氏に会う度にどうしたら人に渡せるとするか聞いてみたところ「うまくいっているならそのままやり続けろ」という期待外れの答えが毎回返ってきました。現時点ではやり続ける環境も整っているようです。講演終了後の恒例のワインパーティーについては書く余裕がなくなりました。

改めて、EwM への皆様のご参加をお待ちしております。